

# 東日本支部だより

2020 年 3 月 5 日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

## 今後の例会予定

第 114 回 定例研究会

2020 年 3 月 14 日(土) 於:大東文化会館

卒・修論発表

第 115 回 定例研究会

2020 年 4 月 11 日(土) 於:お茶の水女子大学

卒・修論発表

第 116 回 定例研究会

2020 年 6 月 6 日(土) 於:東京藝術大学

博論発表

第 117 回 定例研究会

2020 年 7 月 4 日(土) 於:武蔵野音楽大学

※詳細は下記↓↓↓(■定例研究会のお知らせ■)をご覧ください。

## ■定例研究会のお知らせ■

### ◆東日本支部 第 114 回定例研究会

## 中止のお知らせ

3月14日に予定した第114回定例研究会（於：大東文化会館）は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりました。

発表者ほか皆様にはご迷惑をお掛けいたしますが、緊急事態に鑑み、なにとぞご了承ください。

支部委員会は、発表者の皆様とご相談しながら、5月以降の開催可能性を検討し、経過をHP等でお知らせする予定です。

## ◆東日本支部 第 115 回定例研究会

時 2020 年 4 月 11 日(土)13:00~16:30

所 お茶の水女子大学共通講義棟 2 号館 102 室

文京区大塚 2-1-1

(東京メトロ丸の内線 茗荷谷駅下車 徒歩 7 分、

東京メトロ有楽町線 護国寺駅下車 徒歩 9 分)

※ご来校の際には身分証明書をお持ちの上、正門をご利用ください。構内地図は、大学 HP 並びに下記をご参照ください(なお当日、構内に会場案内の掲示はありません)。

[http://www.cf.ocha.ac.jp/help/campusmap\\_1.html](http://www.cf.ocha.ac.jp/help/campusmap_1.html)

### ○卒業論文発表(その2)

1. 三匹獅子舞における「ささら」について

柴森 優花(東京藝術大学)

2. マダン劇におけるタルチュムの継承と発展

高木 園子(東京藝術大学)

3. 十五年戦争期の日本におけるオペラ

—藤原義江と藤原歌劇団によるオペラ上演を中心に—

増山 瑞彩(お茶の水女子大学)

4. 東京 23 区の和楽器店の現状調査

宮武 苑子(東京藝術大学)

5. 西洋楽器導入期における粵劇音楽の様相

—1920~30 年代を中心に—

村岡 南(東京藝術大学)

### ○修士論文発表(その2)

6. 洒落本に見る吉原遊廓の音楽とその機能

—日時奏楽と年中行事に着目して—

青木 慧(東京藝術大学大学院)

7. 東京 2020 文化オリンピックにおける音楽芸術について

石黒 明日香(お茶の水女子大学大学院)

8. 貝原益軒の音楽論とその思想

—『音楽紀聞』を手がかりに—

中川 優子(東京学芸大学大学院)

司会 金光 真理子(横浜国立大学)

## ■定例研究会の報告■

### ◆東日本支部 第 112 回定例研究会

時 2019 年 12 月 7 日(土)14:00~16:30

所 東京藝術大学音楽学部 5-301 教室

司会 金 志善(東京藝術大学)

### ○研究発表

1. 七絃琴譜《歩虚僊譜》の成立時における歴史的位置付け —日本所蔵明清七絃琴文献の調査報告—

鳥谷部 輝彦(東京藝術大学)

(発表要旨)

本発表では《歩虚僊譜》(ほきょせんぷ、1556 年序)の琴史に対する初歩的な調査報告を述べた。本琴譜の伝本は現在の世界上で二点のみ確認される。一点は中国藝術研究院音楽研究所蔵の刊本(《琴曲集成》2010 版第三冊に影印あり)で、楽譜本文のうち第五巻と第六巻のみを残す残欠本である。もう一点は国立公文書館内閣文庫蔵の刊本で、序文・指法・楽譜本文(第一巻から第九巻まで)・跋文を完備する完本である。印刷の欠損箇所を照合することにより、日中両本は同一の版木から印刷されたことがわかる。

撰者の顧挹江は極官が武処州守(現麗水の行政副長官)であり、琴譜制作を長年計画し、退職後に実行した。その祖父は大宗伯(礼部尚書)を務めた。

個別曲の分析では、主に次のような結果を得た。(1)本琴譜のみに載る琴曲は「乃欸吟」(不分段)と「清都引」(不分段)である。このうち「乃欸吟」は後世の《響山堂琴譜》(17 世紀中葉)に「欸乃歌」の第一段となって現れ、この「欸乃歌」を継承した清代琴譜を基にして、現在の「欸乃」が伝承されている。その一方で、明代に伝承された別の「欸乃」は 17 世紀中葉に断絶した。(2)本琴譜一点と他の琴譜一点のみで確認できる琴曲は「静極吟」「寄情操」「讀書吟」である。(3)「雙鶴聽泉吟」は初出が約 40 年早まる。(4)指法の一部に、現代とは異なる偏好が見られる。

琴譜の全体に関しては次のような結果を得た。(5)引吟と

操弄の組み合わせが多い。(6)琴調と琴曲の配列が、徐門正伝の諸琴譜に近似する。(7)本琴譜は同時代の特定の一つの琴譜に依拠したわけではない。(8)そのため、本琴譜は、浙派の徐門正伝の中でも《杏莊太音補遺》(1561年序)または《太音傳習》(1561年序)に近い伝承を持つと考えられる。なお、未解決の課題があるので、その解明を進めている。

本研究活動には、カワイサウンド技術・音楽振興財団から助成金の支援を受けた。

(傍聴記:山寺 美紀子)

明刊の七絃琴譜集『歩虚仙琴譜(歩虚僊譜)』全九巻は、中国では残欠本(巻五・六のみ)一点の現存が確認されるのみだが、日本では内閣文庫に完本(佐伯藩主毛利高標献上本)が存する。内閣文庫本の存在は知られてはいたが、これまで研究した者はおらず、よって今回、鳥谷部氏が内閣文庫の完本を全面的に調査・発表されたのは、意義深いことと言えよう。

発表の要点を挙げると、『歩虚僊譜』は、内閣文庫本の序跋(残欠本は序跋を欠く)によって撰者の経歴、序跋の年代等が明らかになり、また、琴曲の配列・配置法が、浙派の徐門正伝の琴譜集に近似する上、徐門正伝の『杏莊太音補遺』等に見える方針に合致することなどが指摘された。更に、内閣文庫本収載の譜を幾つか取り上げ、他の琴譜集収載の同名異曲ないし異名同系統曲の譜と比較した結果、『歩虚僊譜』は、徐門正伝の中でも『杏莊太音補遺』『太音傳習』の伝承に近いとの見解が示された。フロアからは、内閣文庫本の書誌に関する質問などが出された。今回の内容を中国でも発表されることを期待したい。

支部委員会注:傍聴記は、発表の後日、録音と配布資料によって執筆頂くことを鳥谷部氏の了解を得たうえで、特例として支部委員会から山寺氏に依頼したものである。山寺氏のご協力に改めて御礼申し上げる。

## 2. 「シベリア抑留」における日本人捕虜たちの音楽活動

森谷 理紗

日本学術振興会特別研究員 RPD(大東文化大学)

(発表要旨)

第二次世界大戦後、満州、千島列島、朝鮮半島にいた60万人以上の日本人兵たちが、ソ連軍によってシベリア各地の収容所に移送され、その後数年に渡って労働に従事させられた「シベリア抑留」の問題は、戦後長らく目を向けて来られてこなかった。

だが、文化的側面に目を向けると、一つには異文化接触の場、もう一つには多様な創造活動の場としての興味深い側面が垣間見える。捕虜たちが現地のロシア人の合唱文化に触れ、多くの歌を戦後の日本にもたらしたことは戦後日本音楽史の脈絡からも重要なトピックである。そして、文化創造活動の面では、詩・絵画・歌の創作など癒しを求めて行われた個人的なレベルから、次第に趣味のサークルが形成され、集団レベルでの活動がさまざまな規模で活発に行われたことが分かっている。

これまでの日露の資料調査から、収容所内で多くの替え歌や新たな創作歌が生まれた事、そしてその一方で、こうした流れを受けて行われた自主的な演芸会や結成された楽劇団をソ連側が推奨し、さらに共産主義思想の教育と拡散の機能を持つ専門楽劇団へと改変し、巧みに利用していったという多層的な実態が明らかになってきた。

楽劇団の公演で日本とロシア・ソヴィエトの歌や器楽曲、創作演劇などが披露された他、ハバロフスクで発行された「日本新聞」の紙面では、新しい詩や歌がしばしば公募され、多くの歌や戯曲が生まれた。また、地区ごとの楽劇団を競わせる地方文化コンクールが3回にわたって開催されるなど、文化活動は収容所生活の中で重要な位置を占めていたと言える。

「シベリア抑留」において音楽は、癒し、思想的プロパガンダのツール、そして異文化交流の窓口の3つの役割を持ち、音楽家はソ連側と捕虜たちの中間の存在として自らの

役割を果たしつつ、制約とのネゴシエーションの中でそれ

ぞれの目的意識を持って表現活動をしていった。今後は個別の作品分析からその詳細を具体的に見ていく予定である。

(傍聴記:東田 範子)

シベリア抑留は決して風化させてはならない歴史であり、これまでも様々な研究や手記が発表されているが、森谷氏の発表は、シベリア各地の収容所の文化活動に着目し、強制労働や飢えとは異なる側面に焦点を当てたものである。

発表では、シベリア抑留における音楽活動が癒しとして始まった過程や、ソ連軍による楽劇団の組織化・プロパガンダ伝達へのその利用が論じられた。楽劇団経験者の重要人物としては、青木光一、三波春夫、井上頼豊、黒柳守綱、北川剛らが挙げられる。楽劇団の活発な活動によって、数多くの日本人抑留者がロシアやソヴィエトの音楽に日常的に触れたことから、この過程を「集団的な異文化交流」と捉える視点が提示された。また、楽劇団経験者の一部が、帰国後ロシア音楽受容に重要な役割を果たしたことも指摘された。

音楽と音楽家がソ連軍から一定の敬意をもって扱われていたという事実は、過酷な抑留生活における一筋の光であったに違いない。当時の演奏の音源は存在するのだろうか。今後のいっそうの展開が期待される。

## ◆東日本支部 第113回定例研究会

時 2020年2月1日(土) 13:00~16:15

所 共立女子大学 神田一ツ橋キャンパス 本館108号室  
司会 土田 牧子(共立女子大学)

### ○研究発表

1. 1920年代における京城放送局(JODK)の日本音楽プログラム

金 志善(東京藝術大学)

(発表要旨)

本発表は、植民地朝鮮において京城放送局(JODK)で放送された1920年代の日本音楽プログラムを網羅・分析し、在朝日本人がメディアを通じて享受していた実態を明らかにした。

京城放送局(JODK)は、社団法人という非営利民営放送局として日本の4番目に誕生した。これは、ラジオという新たなメディア媒体、ラジオ聴取者という新たな受容者の出現を生み出し、新たなコミュニケーションの現象が展開されるきっかけとなった。

京城放送局の1920年代におけるプログラムの特徴としては、朝鮮語放送と日本語放送の交差編成に工夫した音楽プログラムが盛り込まれ、放送技術の発展に伴う内地の全国中継放送網により内地演芸中継放送が編成されたことである。日本語・朝鮮語放送は各年度ごとに5:5 → 6:4 → 7:3に変更した。20年代の全体のプログラム編成は、音楽プログラムが最も多くを占めており、朝鮮音楽と日本音楽が同じくらいの比率でプログラムに反映されていた。日本音楽プログラムは、雅楽、浄瑠璃、琵琶、尺八、地域民謡など、当時日本で広く知られていた豊富な演目が編成されており、在朝日本人が十分に享受できる環境を作り上げていた。

日本本土で流行っていた種目の日本音楽は、ラジオプログラムの編成や在朝日本人邦楽家の活動により、ほぼ同時に在朝日本人のコミュニティーに伝わり、普及し、享受されていた。これは、朝鮮社会における音楽をめぐる環境が植民地という特殊性をそのまま現していたと言える。植民者である日本人の音楽文化が朝鮮の土着音楽文化と共存し、日本人のコミュニティーの中で最も祖国を感じさせられる慰安できるものとして植民地朝鮮に存在していた。ラジオ放送は、このような音楽を伝達する役割を最も果たしたのである。「慰安」を一つの目的としていた京城放送局は、プログラムに「日本音楽」を多く編成し放送することで在朝日本人に伝わり、最も慰安できる伝達の役割を果たしたのである。

(傍聴記:山本 華子)

発表者は近年、植民地期朝鮮における日本音楽研究(新日本音楽、歌舞伎等)を継続して行っている。本発表は、1920年代の京城放送局(JODK)の「日本音楽プログラム」を概観するものであった。JODKは朝鮮総督府の支援を受けており、朝鮮総督府の機関紙『京城日報』(1906～1945)に多くの情報が掲載されている。よって、本研究も『京城日報』の関連記事の分析に依拠している。なお、発表者は自ら抽出した『京城日報』音楽関連記事と広告を、昨年、目録集として刊行した。

本発表の結論の一つとして、JODKのプログラムは当時、日本本土で聴取されていた日本音楽の種目を網羅しており、特に新日本音楽と筑前琵琶の人气が高かったことが明らかになった。フロアからは、JODKのプログラム編成形態、ラジオ以外の日本音楽の普及状況、普及の測り方等について質問が出た。

発表者は今後の課題としてJODKの「朝鮮音楽プログラム」の解明を挙げている。本発表は「1920年代の朝鮮」に限定されているため、時間軸と空間軸を広げると、さらに様々な視点からのアプローチが可能になるだろう。

## 2. 小・中学校音楽科における教育内容の分析

—「音楽を形づくっている要素」の下位項目とその階層性—

平野 悠佳(東京成徳大学)

小田切 舞美(東京学芸大学・東京家政大学)

(発表要旨)

本研究の目的は、小学校および中学校学習指導要領における「音楽を形づくっている要素」の下位項目を世界音楽の観点から具体化し、その特徴と階層性を明らかにすることである。

音楽科教育において、国内外の音楽文化を継承し、新たな文化を創造していくために必要な資質・能力を育むためには、様々な時代や地域の音楽を扱うことが望ましい。し

かし、個々の音楽を通して学ばれる知識や技能は、多くの場合特定の音楽ジャンルや楽器に依存するものである。そのような中で、2008(平成20)年告示学習指導要領より明示されるようになった「音楽を形づくっている要素」は、教材曲の生まれた時代や地域、歌唱や器楽といった活動内容等を問わず、全活動に通底する教育内容として捉えられてきた。

しかし、「音楽を形づくっている要素」として示されている「音階」や「拍」等は非常に広い概念であり、実際に特定の音楽を通して学習される5音音階やポリリズムといった具体的な要素は明示されていない。また、音楽の諸要素には「調」と「音階」のような関係性があるが、「音楽を形づくっている要素」は個々の要素の関係性が明示されておらず、それらを解明するような研究も管見の限りない。

そこで本研究では、Savage, E. P. らが提唱した世界音楽の統計的普遍性を応用し、2018(平成29)年告示小学校および中学校学習指導要領に示されている「音楽を形づくっている要素」の下位項目を提案し、関連する文化的特徴とともに図式化することで、要素同士の関係性を示すことを試みた。本研究で示した下位項目は、朝鮮半島固有の音楽概念である「チャンダン(장단)」と「カラッ(가락)」との対応を図示することが出来たことから、文化固有的な事例にも適用可能であることが分かった。

また、本研究で示した下位項目が教科書掲載曲においても確認できるかどうかを検証するため、教科書教材に即した評価規準を開発し、音楽科教科書『小学音楽 音楽のおくりもの』シリーズの掲載曲を分析した。その結果、提案した全ての下位項目の存在を確認することが出来た。

(傍聴記:寺田 己保子)

本発表は、2018年告示小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領における「音楽を形づくっている要素」の下位項目を、Savage, E. P. らが提唱した世界音楽の音楽分類法を応用しその階層性を明らかにすることを目的としたも

のであった。「音楽を形づくっている要素」の下位項目と階層性について図示しながら丁寧に説明され、朝鮮半島の伝統音楽の事例から、一定の範囲で文化固有的な音楽概念を対応づけることができたと言われた。また小学校の教科書掲載曲を用いてこれらの検証もなされた。音色の階層性についての質問に、発表者が階層性の示し方に悩んだと答えたことは、このテーマの難しさを感じさせた。共通事項に「間」「序破急」など日本の伝統音楽の用語が示された時は現場で戸惑いがあったことを思い出す。学校教育での音楽の内容が西洋音楽を主軸としたものである中、本発表のような視点からの研究は重要であり、文科省等関係者にも理解を促したいテーマであると思った。

## ○報告

### 3. もう一つの及川コレクション

—及川尊雄氏収集紙媒体資料—について

前原 恵美(東京文化財研究所)

橋本 かおる(東京藝術大学)

鎌田 紗弓(東京大学)

曾村 みずぎ(東京藝術大学大学院)

(要旨)

及川鳴り物博物館(2015年閉館)の館長を勤めた及川尊雄氏(1942-2018年)は、日本の楽器や生活の中にある「鳴るもの」(これらを及川氏は「鳴り物」と呼ぶ)、楽器製作に使用する道具などの収集家として知られる。その3000点以上に及ぶ楽器等の一部は『阿弗利加(あふりか)から旅して来た日本の楽器たち 音の図書館をめざして』(及川鳴り物博物館、2018年)に図版(約1600点)として収められたが、同書には、及川氏が集めた紙媒体資料も多数掲載されている。

報告者4名は、このたびこれらの紙媒体資料(以下、及川コレクション)の概要調査を行う機会を得た。本発表はその調査報告である。本発表では、まず調査工程と手法を概観して当該資料の注目点を整理したのち、それぞれの特徴あ

る4つの資料群について報告した。まず、近代の大礼・大喪用の楽器をはじめ宮内省関係の多くの仕事を手掛けた京都の楽器商「佐竹招慶堂」に関する「1. 佐竹藤三郎関係資料(橋本)」、次に、旧楽家外で初の式部寮伶人となった人物とその長男による奏楽・教授活動の実態を窺わせる「2. 堀川久民・師克関係資料(鎌田)」、続いて、内国勸業博覧会や五二會等に係る箏・三味線製作販売者側の情報を含む「3. 今村権七関係資料(前原)」、最後に、これまで刊行が確認されていなかった号を含む『琵琶新聞』や錦心流機関誌といった「4. 近代琵琶関係資料(曾村)」を取り上げた。本報告は膨大な及川コレクションのごく一部についての限られた視点からの考察ではあるが、幅広い時代、種目、国・地域にわたる及川コレクションの豊富な示唆の一端を提示した。

なお本発表において、及川コレクションの目録に上記4つの小稿を加えた冊子を、2020年3月に東京文化財研究所より刊行予定であると告知したが、その後、さらに追加すべき及川コレクションがあるとの情報を得たため、これらの調査を行ったのち、改めて2020年秋を目途に冊子を刊行することになった。

本調査へのご理解とご協力を賜り、当日の例会にも足を運んでくださった及川氏のご夫人・及川淑子(ひでこ)様、ご長男・及川雅弘氏に改めて深謝申し上げます。

(傍聴記: 中川 優子)

60分にわたる本報告では、まず及川尊雄氏が生前に自身のコレクションの理論編に相当するものを構想しておられたことが前原氏より明かされた。調査の概要では、平成30年10月から現在に至る作業工程が写真とともに確認されたのち、現時点での整理・分類状況として、形態・内容別による資料の分布が表で示された。形態は文献(本や譜、書面、及川氏自身によるメモ書きなどとくに多様)や画像・視聴覚資料等に分類でき、また内容については雅楽をはじめとする個別の音楽ジャンルから美術等の関連分野にま

に至るとのことで、及川氏の関心が幅広く横断的であることがみてとれた。

コレクションの特徴としては、私的な資料や従来の研究状況を補う資料が含まれることが挙げられ、各論でその具体例が報告された。まず橋本氏は、佐竹藤三郎に関連した100点超の資料群について、とくに大正年間の大礼・大喪に際する書状や内部資料を紹介し、当時の雅楽界の舞台裏ともいふべき、宮内省と楽器商との実際のやりとりを窺わせた。また鎌田氏は、堀川父子関連の資料が楽譜を中心に散見されたとして、譜字等の具体的検討をもとにその一部を紹介し、明治期以降の関西方面における雅楽について、他機関所蔵資料とは異なった側面からその環境や実態を見出せるとした。さらに先行研究の乏しい今村権七にかんする資料について、前原氏は他機関所蔵資料とこれをつき合わせたうえで、今村の経歴や博覧会出品に際する手続き、公私の交流関係、さらには及川氏自身の楽器制作への関心もみてとれると指摘した。近代琵琶の定期刊行物に着目した曾村氏は、従来の刊行状況の把握を補完する号や錦心流の展開にかかわる機関誌群の発見、さらに戦前の享受の様相を示す詞章部分への書きこみの確認から、近代琵琶研究が大いに進展することを示唆した。

当該コレクションが音楽史の新たな側面を補完しうるものであることはもとより、幅広い関心を寄せた及川氏自身の音楽にたいする理解の様相を窺い知れるものとしても大変貴重な資料群である。将来的な保存・活用等については未定とのことだが、まずは目録の完成が待ち遠しく思われる。

## ■会員の声 投稿募集■

1. 次号締切: 2020年5月20日 (6月下旬発行予定)
2. 原稿の送り先および送付方法:  
学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)  
〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号  
Fax: 03-3832-5152、E-mail: tog.higashi@gmail.com
3. 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)
4. 内容: 会員の皆様に知らせたいと思う情報  
(1) 催し物・出版物などの情報  
研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。  
(2) 学会への要望や質問  
支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。  
※原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきます。

(東日本支部だより担当)

## ■定例研究会発表募集 (7月例会)

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております  
発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、4月30日までに、東日本支部事務局までお申し込み下さい  
([tog.higashi@gmail.com](mailto:tog.higashi@gmail.com) あてメール添付か郵送)。

なお、メールご利用の方で、発表希望を提出後1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

## ■編集後記■

今号の支部だよりでは、12月例会、2月例会に行なわれた研究発表及び報告、そして3月、4月の例会のご案内をお届けします。

東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からのお申し込みをお待ちしております。本誌の「会員の声」にも情報をお寄せいただき、ご活用ください。次号の発行は6月下旬を予定しております。(MK)

\*\*\*\*\*

発行：一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集：奥山けい子、尾高暁子

倉脇雅子、齊藤紀子、佐藤文香

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com

\*\*\*\*\*